

新時代の織匠 高力直寛



ジャカードによる織法を初めて桐生に伝えたのは佐倉常七の弟善七であったが、企業ベースにのる本格的な織法技術は、高力直寛のちに京都府染色試験場長、市立織物学校長となる）によってもたらされている。

高力は慶応元年五月、羽前松山藩家老屋代家の四男として生まれている。明治十五年十八歳の時、桐生の機業家森山芳平のもとに寄食し、機織家としての道を歩むことになる。

高力と西陣との関わりは、明治十九年、彼二十二歳のときであるが、そのときすでに彼は米国から輸入された紋彫器ピアノマシンの使用法を研究、実用化の道を拓いていた。主人森山芳平の命により彼は佐倉常七の許に寄宿し、ジャカードの使用法の実習研究を始めることになるが、その経緯は興味深い。

森山が高力を西陣に派遣することを決意したのは、明治十八年上野共

進会で京都出品織物の優秀さに驚嘆し、ジャカードによる織法研究の必要性を痛感したためである。彼が西陣への伝手を模索していたところ、羽二重の指導をもとめてやってきた福井県の村野文治郎に、交換条件として西陣機業家の紹介を依頼したのである。そこで村野は織殿伝習生時代の師である佐倉常七を指名、高力派遣の仲介をしている。森山が近藤徳太郎の主宰する織殿を避けたのは、同じ共進会審査官の地位にあったためこだわりがあったのだろう。

高力は明治十九年四月、村野の紹介状を持って佐倉常七を訪れ、およそ一年ジャカードによる機織伝習を続け、翌二十年三月、福井へ羽二重の指導に向かっている。

ジャカードの織法を修め、さらに当時京都で利用されていたドビーを桐生に移入して紋織の発達をもたらした高力直寛の歩みを見ると、そこに新時代の技術者台頭の息吹が感じられる。産地間のこだわりや、固有技術を秘伝として密やかに守るだけでは技術の進歩はない。高力はそうした閉鎖性を超える役割を果たしたと考えるからである。